

## 国語の発明、方言の発明、国史の発明

著者	益子 英雅
雑誌名	沖縄文化研究
巻	23
ページ	173-200
発行年	1997-03-10
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/00015816">http://hdl.handle.net/10114/00015816</a>

## 国語の発明、方言の発明、国史の発明

ましこ・ひでのり

はじめに

意外かもしれないが、この論文は国語学の再生をめざしている。もちろん、ここでの「国語学」とは、通常のアカデミック・アイデンティティという「日本語学」の旧称ではない（国語学と日本語学を別物とみなすたちばは、ここではおく）。いまはなき国語学者、亀井孝の「言語社会学の分野」というプランⅡ「国家語学」の略称としての「国語学」という、一般にあまりなじみのない把握である（国語学会編『国語学大辞典』の「国語学」の項。1980：372）。

具体的には、国民国家日本の形成過程と近・現代琉球諸島の動向をモデル化しようという知識社会

学的ところみである。既存の国語学および社会言語学とはおよそイメージがことなるし、違和感をおぼえるむきもあるだろう。また専門のかたがたからみれば遺漏もおおかろうが、ご批判いただきたい。

## — ことばの同一性再考 —

民族と国家の境界線の不一致。それはたとえば社会学でのエスニシティ論のはやりなどをみても、ようやく「常識」化しつつある。しかし公教育現場における、たとえば地理／公民／現代社会といった教科において、民族と国家の境界線の不一致のあつかいをみると、知識人の流行とはおよそ波長があっていないことがわかる。教科書／大衆のレベルでは、依然として世界は（基本的に）単一民族国家と多民族国家にわかれ、日本は前者にあてはまるという「常識」がまかりとおっているのである。

ここで知識人のエスニシティ論のはやりといったものは国民国家の「常識」水準からは遊離したものにすぎないという総括でいいのかという問題を提起したい。知識人がごく最近まで大衆と大差ない意識水準にあったのに、急速に「覚醒」したというなら、早晩大衆がおいつくかもしれないという樂觀をのべることも可能である。しかし、はたしてそうなのか。いまどきの知識人のなかで「単一民族国家」イメージを無前提にふりまわすものは少数派となった、そしてそれが急速に知的大衆にひろまりつあるという事態も否定できない。しかしそれとやらはらに「民族語なるものの一体性のあいまいさ」については、「常識」化するのは気がとくなるほどききだろうという観がある。

もちろん言語学者のなかでは（いわゆる国語学者は別かもしれないが）、「〇〇語」というひとかたまりを確定することが想像以上に困難をきわめることをわきまえてきた。近代言語学は地域的／時的には国民国家がぞくぞく形成されつつあったヨーロッパ近代にはぐくまれた。つまりそれはナショナリズムの申し子なのだが、同時に逆説的ながらインド・ヨーロッパ語族という壮大なroman主義をその推進力のひとつとしてかかえこんでいた。ヨーロッパ大陸の言語学者たちが、みずからのアイデンティティをromaniスト／germanistなどとなるとおり、はなしことばはたがいに連続しあい、本来的に国民国家のわくぐみを越境しているのであった。国民国家が内部的統合をはかり、対外的に「一枚岩」をうそぶくために、装置としてかかえこんできた文法典（規範文法／正書法システム／辞典）と「義務」教育。田中克彦らが再三批判をくりかえしてきた体制の背後にひかえていたのは、ほかならぬ言語学者であった。しかし、言語学者は国家利害とは別次元のパラダイムとして、諸方言の連続性／越境性を十分認識していたのである。しかもここでいう連続性は方言連続体となり同士はわずかな差異だけで十分相互理解が可能なのに、すくなくとも連続体の両端同士は相互理解不能という逆説をはらんでいた。おそくとも、二十世紀初頭に言語学方法論を講義していたソシュールにして、この逆説と越境性は十分すぎるほど自覚されていた。とりわけ、越境性については「言語と方言のあいだのどこに差異があるのかをいうのはむずかしい。しばしば、ある方言が文学をうみだしたという理由から言語という肩書きをえる。ポルトガル語やオランダ語のケースがそれである」という皮

肉っぽい指摘がなされている [Saussure 1916=1982: 278]。

有力ヨーロッパ語のいくつかは境線をまたいでもちいられている。そういった地域にくらすひとびとは、「あなたは何か国語をはなせますか？」といったのがナンセンスであることを実感しているはずだ（実はドイツ／フランス両国の庶民は「国語」が有力言語であるため、意外にバイリンガルはすくなく、「外国」語べたがおおいらしいが）。ところが、ヨーロッパの社会言語学のテキスト／啓発書は、「方言連続体」の逆説をのべることで初学者の「常識」をひっくりかえし、仰天させることをもって、知的ゲームへのイントロダクションⅡ「通過儀礼」ところをえっているとしかおもえない [Trudgill 1974=1983, Hudson 1980]。ソシュールの「講義」から半世紀以上へてもである。

何人もの社会言語学者がとりあげるとおり、国境をへだてながらも、たがいに通じあう地域住民がそれぞれを外国語よばわりし、自分たちのことばをききとれない首都方言のほうをみてくらしている（首都方言によるテレビ／ラジオをみききし、雑誌／新聞／教科書を消費する）。方言連続体の両端のひきおこす逆説を、プリズムによる分光スペクトルの連続体がアカ／キ／ミドリ／アオ／ムラサキとつらなりながら差異のつきかさなりが絶対的異質へと変質することになぞらえられるとするなら、この逆説はアオミドリとミドリとがたがいに異色だといったることになぞらえられるといえよう。

要するに、通じるかどうかは「おなじことば」かどうかを保証してくれない。そして、こうした非「常識」的な見解は、実は職業的言語学者の素養の一部なのである。それなのに、このことはあと

でのべるように、一般大衆にはしらされていない通説である。「通過儀礼」をくぐりぬけようとする、いささかマゾヒスティックで奇特な学生／読者にだけさずけられる「秘儀」なのだ。もし、一般的な知識なら、わざわざテキスト・啓発書で半世紀以上もくりかえしつづけてきたはずがなからう。

さらに、通じるかどうか（相互理解可能性）も実体ではない、という「非常識」的な専門家の常識がからむので、なおさらややこしい。第一に、首都方言話者は有力方言以外の知識にとぼしく、とりわけ周縁方言は話者のあゆみより（妥協）なしには理解できない。逆に、周縁方言話者が首都方言について無知である可能性は皆無にちかい。まさに「無知は力」なのだ。つぎに、周辺方言についての知識には相当の個人差があり、また、ナレと意欲の問題も決定的にきいてくる。a方言とz方言の話者同士がいつもつうじないわけではない一方、m方言とn方言の話者同士がいつも問題なくつうじるという保証もないのだ。さらにaとzという方言連続体のそとがわには、α方言からω方言までつらなる別言語があると一般にはみなされているが、現実にはa方言とα方言とは意欲次第で十分つうじたりするのだった。要するに、連続／非連続の程度をある指標にそって数値化できたにしても、各主体や場面によって、伝達の実質／印象がばらばらなのである。昨今のアングスン・ブームをまつまでもなく、義務教育／徴兵制と出版資本主義市場は、生活語からかけはなれた標準語商品を消費することによって一体感をわかちあう「想像される共同体」の構成員を大量にはぐくんできた。a方言話者がz方言を同一言語＝国語と、またa／zが共有するxという要素の原型Xをとどめる文献を共通の古語とみ

なしてうたがわなくなる。うらはらに $\alpha$ 変種は別言語Ⅱ外国語の方言に転落していく。

田中克彦が指摘するとおり、ソシユールは言語学独自の方法論を確立する使命感をいだいており、自律的体系としての固有語（イディオム）をあらゆる社会学的な序列意識からきりはなして対象化するという方向性をうちだした。それはいまでいうクレオール研究にもつらなるようなラディカルさをそなえながら、同時に歴史的／社会学的布置関係についての超越論的言語観でもあった。ミクロな権力関係や、階級／階層／性差／年齢差／ほか下位集団相互の言語的差異からめをそらした均質的／静態的モデルであるといった、のちの社会言語学者たちの批判はおこう。問題は地理的／政治的な刻印をすべて「外的言語学」として、言語学固有の領域ではないとした点の後世への影響力である。

それは、端的にはチョムスキーらの「方言とか共通語といった問題は言語学のテーマではない」、といった挑発的断言に、もうすこしひかえめな表現でいえば、「言語と方言という概念は純粹に言語学的なものではない。両者の区別は言語外的な、歴史社会的な条件によって規定されたものである」〔上村1975:10〕といった専門家のナワバリ意識に、象徴的にしめされているといえるだろう。

おそらく社会言語学者をなならない職業的研究者にとって、「方言とか共通語といった問題は言語学のテーマではない」というのは方法論上あたりまえのことなのだろう。学史上ないし理論的に興味ぶかい固有語（それはクレオールであってもかまわないばかりか、ときにはピジンさえ独自の体系とみなされる）が目前にあって、それをただ記述／分析することだけが責務である。もちろん、比較言

語学や歴史言語学にたずさわるものは、隣接する体系との距離を問題にするかもしれないが、それが別言語関係なのか方言関係なのかは、まさに「言語外的な、歴史社会的な条件によって規定されたもの」にほかならず、言語学的なものではないとみなすのである。

しかし方法論／データ双方で、社会学／社会心理学／政治学／地理学等、社会諸科学を隣接領域としてとりこんできた社会言語学にとっては、「言語と方言という概念」の区別が「言語外的」であるとか「純粹に言語学的なものではない」といった「禁欲」は〈逃げ〉でしかない。しかも、社会言語学をならない職業言語学者が、「純粹に言語学的なものではない」はずの「言語と方言という概念」について、つねに禁欲しているかという点、啓発的著作や講演会などではそうでもないのである。

## 二 国語教科書がはらむイデオロギー

中学教科書のひとつをとりあげてみよう（東京書籍『新しい国語2』一九九二年文部省検定済一九九六年発行）。国語学者のひとりはおきおろしの文章で、世界にどのくらいのかずのことばがあるかという質問にこたえるかたちで、はなして通じないなら別言語というこまかいわけかたでおよそ三千、「共通点を見つけてくくってみても」千五百のかずの「言語」があるとする（林巨樹／「日本語」ってなんだろう）。まず、三千とか千五百といった実数の妥当性自体が問題である。ことばの異同は通じる／通じないとは別の社会心理学的実在（「社会的事実」としての言語アイデンティティ）である。



へだたりたいとねがう集団は、隣接集団とのささいなちがいを強調し、ときにはへだたりを「造成」しさえする（田中／ハールマン1985：68-82）。最近とみにとりざたされる「発明された伝統」は社会言語学者たちに（いや、ソシュールらにさえ）とって常識的事実だった。

それだけではない。異同の判定をもとめられた言語学者は、「音韻体系、文法、語彙などの項目にしたがって、与えられた二種類のことばの間の遠近を測定する」のだが、「容易に借用され最も流動しやすい部分」である「語彙の比較」は最後にまわされるのである。その結果「話し手にとっては、共通の語彙が多ければ多いほど二つの言語は近いと思われる」という素朴な実感はしばしば言語学者の判断とはくいちがいかねない（同上）。かきことば上での日本語／シナ語族などは近代までの相互受容の結果、外見上非常にかよってくる（「簡体字でない文献は漢字だけひろいよみすれば、外国文献でもなんとか内容の見当がつく」といった先入観は東アジアではごく一般的である）。

しかも田中克彦によれば、ことばを「きちんとした数」として「出したとたん、じつは言語学は言語の本質をとらえそこない、あるいはみずからウソをつき、人を欺くエセ学問に転落してしまうおそれがある」。なぜなら、ニューギニアのように「多くのことばをかかえていながら、見捨てられたように残された地域」があつて、この島だけで研究者により五百―千までのさまざまな説にわかれてしまふのである。おおくの研究者が経済的動機から有力言語にかたよる以上、こうした膨大なかずの弱小言語群には、まともなリサーチがすむけはいがない。啓発的な新書判の冒頭部分ちかくでここまで

かかれながら、言語学者のはしくれである筆者はこりもせず、もっともらしい三千という実数をあげることで「人を欺くエセ学問に転落」してしまっていることの自覚がないらしい（「田中1981」）しかしこのロングセラーを言語学者がよんでいないとは、にわかには信じがたいが）。

しかし、より本質的な問題は具体的な記述に象徴的にあらわれる。

例えば、私が沖縄のある島に行って、その土地のおじいさんとおばあさんがその土地の方言で話しているのを聞いても、ほとんど理解できない。しかし「私は東京から来ましたが……」と云って話してみると、ちゃんと通じるし、そのおじいさん、おばあさんの言うことも分かる、となる。と、琉球方言を含んだ「日本語」を一つの言語と認める、というわけです（林、同上）。

この記述のウソは、社会言語学の基本的知見さえそなえていればたちどころにバレる。まず政治／経済／文化的にあきらかな優劣関係にあるふたつの集団があるとき、優位集団が劣位集団の日常生活言語についてまったく無知で、それと対照的に、劣位集団が優位集団の言語システムに相当程度あわせてられるという「無知は力なり」は、前述した国民国家の中央・周縁にかぎらず普遍的な現象である。優位集団／劣位集団が日常的にまったく別言語をはなし、接触場面でのみ劣位集団のバイリンガルが観察できるという現象は植民地支配や奴隷制度などであたりまえのこととしてくりかえされてきた。

こうしたことを無視したうえで、通じるから同一言語とみなすという論理の強引さと、それをしるうとにおしつける問題性はいうまでもないだろう。もちろん、これに言語系統論などをからめて、一

種の「日琉同祖」論を展開するなどはイデオロギー的総括でしかない。はなしでの意識は、文献学／歴史言語学という、あとぢえをとまわらないかぎり、つねに共時的な構造をもつからだ。

それはともかく、通じる／通じないという基準をあえてとらず「共通点を見つけてくくって」みるとは、どういうことか？ 本来それは語彙などの共通性が相互受容によってにかよってしまうこと

をかんがえあわせることで、はなしでの共時的実感を超越したたちばにたつという意識的選択のほずである。であれば、日本列島諸方言と琉球列島諸方言の文法構造／音韻構造などの距離を数量化し、それが同一カテゴリーにまとめるべきものなのか、別あつらえにすべきなのかを判断するというのがてすじというものだろう。しかしこの筆者は結局のところ、東京方言ないし標準語でかたりかけたときに現地の住民に通じること、返答がやはり理解できることをもって、〈琉球方言を含んだ「日本語」を一つの言語と認める〉と結論づけてしまうのである。はなしでの通じるという実感をあてにせずに、ことばの体系の連続／非連続のどあい客観的にえがきだすことで「共通点」をさがし、《くくる》というなら、現地住民の非日常的な（よそものあいての）ものいいがわかるかどうかなど、もちだす必要はなからう。うがってみるならば、通じる／通じないという日常の実感を超越して「共通点を見つけてくくって」みるとは、「実感」をおさえこむための権威主義にすぎず、実は、はじめから〈琉球方言を含んだ「日本語」を一つの言語と認める〉という結論がきまっていたのだと、みることができる。つまり、「その土地の方言で話しているのを聞いても、ほとんど理解できない」のだから、そ

こでの日常語は別言語だ、という結論を封じるための装置なのである。事実百年まえの琉球列島住民の大半は「外国語」をおしえこまれていると感じただろうし、日本政府によって一八八〇年につくられたはじめての公教育機関「会話伝習所」は現地下僚／通訳養成機関だった。そして琉球なまりは深刻な社会問題とみなされたから、地元知識人のおおくも、ピジン日本語／伝統方言のバイリンガルにすぎず、大衆はしばらくのあいだ、おろおろしながら「外国語」をきくのでせいっぱいという状況がつづいたにちがいない。知識人が、①他府県人をまじえた公的空間でのピジン日本語と②私的空間での伝統方言をつかいわけけるのを、バイリンガルとみるか、同一言語内のディグロッシア（二層言語状況）とみなすかは、政治的統合と住民感情の関数が決することであって、相対的な問題である。

さて、こうした方言論については、林以外の記述が掲載されていることで、バランスがとれているのだと強弁する論者がでるにちがいない。「共通語と方言」という無署名のコラム記事である（同上）。たしかに、林の記述とは別角度で、江戸時代に各地のことばがつうじなかつたこと、そして「同じ国の人どうし、互いの話を通じるよう、共通の言葉を持つと、その考え方から生まれたのが共通語です」と記述することで、「共通語」が人為的構成物であること、しかも近代の産物であることが、さりげなくつたえられている。しかし、つぎの記述は、いきすぎである。

共通語は、全国的に広がっています。今の日本では共通語を使えば全国どこに出かけても話が通じます。言葉の壁をなくしたことで、わたしたちの生活の場は広くなり、便利になりました。

全国の住民がはなす全国共通語が実在しないことは証明するまでもなからう。実際に発話される音声言語がせまい範囲に収斂しないことはあきらかだからである。逆にきいてわかるだけなら、京阪神方言群の要素の大半は立派に共通語といえる。現実にある地域／階層方言をもとにした標準語が規範としての事実としてひろめられ、その圧力／求心力のもと、地域ごとの「へなぞり」が定着した地域共通語群があるにすぎない。それなのに全国共通語が実体であるかのように論じている点、むかしは「言葉の壁」があり「便利」でなかったようなイメージをおしつける点、さらには、一部集団の規範が全国／全階層におしつけられてきたという暴力性がおおいかくされている点で、あきらかに客観的事実からはずれている。ヒトの交流がすすむにつれて自然に共通語が形成されていくというみとおしをたてていた論者がいたこと、それを「同じ国の人どうし、互いの話が通じるよう、共通の言葉」をもたないかぎり外圧に屈伏するというエリートの危機感がおしつづすかたちで、方言弾圧、標準語おしつけがおこなわれたという歴史的事実にふれないのは、現状の正当化（「結果がよければ過程をおきた多少の矛盾はめをつぶろう」）以外のなものでもない。

まず、標準語は、戦前の東京の山の手の地域の中産階級、中等教育経験者のはなしことばを基準とすることで、学校教育や日本放送協会などの指導のもとに全国的にひろめられ、地域によってはきびしいおしつけ、地域語弾圧もおこり、いのちにかかわる抑圧をうけたひとびとさえでたことは、沖縄県民にはまさに「釈迦に説法」だろう。ともあれ、こうした事態は、植民地化の危機におののく、明治

期の指導者たちのあせりがうみだしたものだ。ことはいうまでもない。ひとの交流の質／量のたかまりによる自然な共通語の成立をまてず、規範としての標準語を全国一律にあてはめようとしたので、こういった運動についていけない地域／個人は、野蠻／下品／不勉強／不謹慎といった差別をうけ、いわれのない劣等感／恐怖感をうえつけられたわけだ。戦後になっても蔑視はなかなかあらたまらず、さらには、わかいひとびと、教育をおくうけたひとびとによって、としよりやめぐまれないひとびとを、さげすみ、東京ふうのことばづかいをすることがよいこと／すぐれたこと／あたらしいかのようになり、はきちがえたかんがえがひろまった。その結果、全国のはなしことは、急速にちかづきあい、伝統的な地域語はとしよりやめぐまれないひとびとにだけ、みられるようなありさまであることはいうまでもない。自分の祖父母の伝統的な地域語をききとることさえできない、わかい世代が劇的にふえていて、ちかい将来、伝統的な地域語がすっかりすたれてしまうときがくるにちがいない。

沖縄県民のおおぐが、自県だけが方言撲滅の被害者であるとの「通説」をうえこまれているようだが、すくなくとも東北方言は同様のあつかいをうけていたし、鹿児島方言が強烈な標準語励行運動を戦後うみだしたこと〔柴田1958〕は、標準語コンプレクス（俗にいう「方言コンプレクス」）が沖縄県の専売特許でないことしめている。

ところで、こうした強烈な同化志向にもかかわらず、全国共通語が未完成であることをみおとしてはならない。地域でも伝統方言は老年世代以外衰微しつつあるが、生活語における地域性は明白で、

公的領域でも地域共通語が支配的だからだ。首都圏のひとびとだけはこうしたつかいわけがなく（文体の差はあるが）、また地域のひとびとが地域共通語であい対するので、全国が共通語でむすばれているような錯覚におちいりがちだ。また、ときどきみみにした新方言を伝統的な方言だと誤解して、「素朴さ」と勘ちがいすることもしばしばである。

全国が大体にかよったことばでつながるというのは、一面とても便利にみえるけれども、その代償として、地域語がほろびつつあることをわすれてはならない。また首都圏のひとびとは、それ以外の地域の地域共通語と標準語とのズレに敏感で、依然おとしたもの／おくれたものとしてさげすむ傾向がなくなっていない。また同時に、地域のひとびとは、標準語をはなす首都圏にひとびとを、すぐれたもの／すすんだものとみなして劣等感を感じる反面、つめたく／ずるいといった、よそよしさも感じており、それは自分たちがつかう地域共通語についてさえあてはまる。これらのことは、こうしてしるしている、かきことば日本語の統一性／規範性が反映していて、地域語をモジ化することには、相当の抵抗感がともなうことと、せなかあわせなのだ（京大教授も関西弁で論文はかけない）。沖縄島のことばをはじめとして、地域の生活語のおとを忠実にうつしとって、かきことばを展開しようとしたら、特殊な記号をつかわず、かながき／ローマ字がきでも、外国語のようにみえるにちがいない。事実、ヨーロッパでは、そういったところみだけで「外国語」あつかいをかちとってしまう例が、しばしばみうけられるほどだ。「外国語」同士かどうかは、はなして通じるかどうかではなくて、むし

ろ、別々にやっていきたいという地域のひとびとのきもちが決定的にへだたりをくみたてるのだから。ことばのちがいは物理的へだたりではなく心理的へだたりがおおきいし、それは過去数百年から数十年といったみじかい期間に「発明された伝統」であることさえ、まれではないのである。

しかし教科書執筆者は、

生まれ育った間に身につけた言葉には愛着があり、共通語にはよそよそしさがあるという場合もあります。しかし、そうであっても、共通語には共通語としての価値があることを忘れてはなりません。(同上)

と説教をたれる。疎外感は克服しろ。でないと「同じ国の人どうし、互いの話が通じる」という前提がくずれるというわけだ。しかし地域にくらすひとびとは「共通の言葉を持つとう」などと努力したりはしない(「沖縄県」は例外的である)。差別されるのがこわくてあるいは公的空間、他府県人むけには、標準語にちがつけないかぎりやっていけないと強迫観念においこまれているうちに、地域共通語をくちにするようになり、また地域語をつかいこなせなくなってきたにすぎない。うえの教科書記述は方言をさげすんだりはしていない(文部官僚自体がゆるさない)が、東京方言『標準語』全国共通語という規範意識にメスをくわえることはせず、むしろ構造をおおいかくし、「常識化」をはかろうとしていることは、あきらかだ。漢字システムの事実上の正当化と同様、現在あるものを批判をくわえずに受容させようとする、「かくれたカリキュラム」がみてとれる。そのうらには、政治性をおび



るおそれのあるデータは、専門家のむねのうちにしまっておくという「影の学問（ダグラス・ラミス）」の構造がうめこまれているとかんがえられる。

社会言語学的観点をふまえているはずの研究者が教科書のためにかきおろした記述の水準はこの程度なのである。テキスト群のうち特別すぐれた教科書をとりあげるとか、複数の教科書を質的に比較ないし量的に処理する興味をそえられるようなしろものではないのだ。あからさまに国家主義的にはみえないものの、実は国民国家のイデオロギー的正統化の装置であることが、あきらかだろう。

### 三 社会言語学の公理からみた日本語／琉球語関係

まず確認されるべき前提は、琉球方言を含んだ「日本語」を一つの言語と認めるという言語系統論のたちばとは別に、琉球方言群／日本方言群というふたつの別の方言連続帯とみなすたちばもありうるという認識である。欧州では、琉球方言群／日本方言群それぞれの内部偏差以下のへだたりでも別言語とみなされるばあいが多くないし、琉球方言群／日本方言群相互のへだたりは、語彙／文法／背景文化の全面において外国語同士の関係にちかい（シナ語族のように、それ以上の実質的偏差があっても、モジを共有化することで、同一言語だという意識がたもたれる例は例外的である）。

琉球方言群地域で標準語教育が強力に展開され、自身が日本語のおとった／おくれた変種のひとつなのだという近代国民国家のイデオロギー＝偏見をおしつけられ、地域住民もそうおもいこまされた。

その結果、ピジン日本語／伝統方言のバイリンガルが一般化したことで、地域語が日本語の一部なのだという意識が一般化したにすぎない。差別／恫喝をともなった同化政策と活字出版資本主義の結果、「想像された共同体」(Ⓐ アンダスン)としての国民国家日本がうけいれられ同時に「発明された伝統」としての日本語が伝統方言をおいつめてきた。その結果、ピジン日本語／伝統方言のバイリンガルはディグロッシア(公私二層言語状況／*diglossia* ファーガスン)としてうけとめられるようになり、ついには、地域共通語(琉球音韻・アクセントによる標準語のなぞり)／日本語クレオール(ウチナー・ヤマトウグチ)のディグロッシアが若年世代ほど一般化してきた。伝統方言をはなせないのがごく普通だし(わかもので敬語法までを駆使できるのは、「無形文化財」的とおもわれる)、十分にききとれない世代が多数派になりつつある(伝統方言共同体の事実上の解体傾向)。

無論こうした変動は琉球列島にかぎらず日本列島各地でも遍在したが、はなしこととしての異質感と、独自のモジ文化のねづよさという両面で、関西方言群と、琉球方言群は突出した位置にあると  
いってよい。

いわゆる「祖国復帰」運動のさなか、琉球語という表現自体が、運動の妨害として非難されかねない、という田中克彦の推察(一九八一)が、単なるコロンブスのたまごのようにみえて実はねぶかい本質をいっきっていることに、ひとびとはほとんど注目してこなかった。言語学者のおおくは独自の言語であるか方言であるかに客観的な指標がないことまでは概説する(しかし、啓発書でふせること

は国語教科書で立証された)。しかし、田中らの指摘は言語学者が方言差としか判定しない差異を、分離主義者たちが「言語」差であるといいはり別個の国民国家を形成してきたという「社会的事実」(デュルケム／ソシュール)のもつ政治力学である。通じる／通じないという素朴な実感＝実用主義も、それとは別の客観主義的分類も、政治的現実がこえてしまうのだ。ここからみちびきだされる日琉関係は以下のような冷徹たる現実にはかならない。

- (1) 伊波普猷をはじめとして、日本語／琉球語の系統論をてがけた研究者はおおい。しかし、社会言語学が把握してきたヨーロッパの現実とは、相互理解可能性とも歴史的経緯とも別次元の共属性についての社会心理学的「実感」が構成する社会的事実であり、まさに同一性の恣意性といえる。
- (2) したがって、日本語／琉球語の系統論は、アカデミックな理論的関心以外では生産的ではない。日本語／琉球語のそれぞれのはなしてが、たがいのことばを理解できないからといって、別言語と分類することはできないし、相互にあきらかな共通要素／対応関係があるからといって、同一言語と判定することもできないのだから。単語／語法の伝播・影響でしかないのか、本質的にえだわかれ、ないし合流したのかなど歴史言語学的実証も、現状の政治的現実のまえでは無意味。
- (3) むしろ、現実の政治情勢が、各集団にとって好都合な歴史データを我田引水していくにすぎない。明治期の日／琉双方の知識人の日琉同祖論もそれなりに根拠があるし、米軍がきりはなしの根拠においた文化的断絶にも同様の妥当性がある。奄美を沖縄島周辺とひとくくりにし、先島とへだ

てる分類も合理的なら、奄美群島／沖縄諸島／先島諸島といった「三分島案」も十分ありえるし先島をさらに下位分類するほうがのぞましいというたちばもちろん否定できない。

(4) DNA情報の距離測定とか、特定の文化項目（言語文化も当然ふくまれる）の分布状況を根拠として過去の集団移住や文化的伝播をかたる人類学的系統論。また基礎語彙の共通度とか、音韻対応法則といった言語系統論。これら実証データも、残酷ないいかただが現状の政治情勢の客観的根拠にはなりえず、ただ都合で利用されるにすぎない。血のつながりと文化が別次元であるだけでなく、時空間における文化的連続性と現実の政治的連続性も別次元でしかないのだから。

(5) 要するに、民族的同一性（血縁的連続性／文化的共通性）は政治的同一性（同一国境線内にかこまれた国土にくらす国民）を享受すべきであるという、特殊近代的なナショナリズムがただしいかのようにおもわれてしまったから、理論と現実がぎくしゃくしたにすぎない。

(6) したがって、琉球語／日本語の相互理解可能性が0にちかいという事実をもって独立を根拠づけることは、ひとつの政治的選択にはかならず、自明の自然さとはとてもいえないし、逆にウチナー・ヤマトウグチが標準日本語にかぎりなくちかいからといって、独立が無根拠というわけでもない。かきことばを別あつらえにするとか（いわゆる「沖縄モジ」でもいい）、発音／アクセント／語法などを距離化するといった戦術を積極的にとること、十分異質化することが可能だから（井上ひさし『吉里吉里人』はヨーロッパの現実ののりこえられている）。若年層で伝統方

言を駆使できなくなったから、もはやヤマトウへの屈伏はうごかしがたい趨勢であると結論づけるのも、単なる政治的選択にすぎない(科学めかして「趨勢命題」化するのはデマゴギーである)。

こうした社会言語学的「現実」の断片はひとつとが日常的に実感ずみのはずだし、公的にも文学的とりくみや時事的提言、エッセイなどのかたちで表明されてきたにちがいない。しかし、菅見ではこういった社会言語学的「公理」を全面展開した議論をめたことがないし、一般むけに啓発活動をこころみた言語学者もみききしたことがない(もしいらしたら、おおしえいただきたい)。

前節でみたように、国語教科書はイデオロギー装置の体をなしていた。百歩ゆずって、こどもたちには、あからさまな政治力学はむごたらしいから、ふせておくのだといった「配慮」をみとめよう。しかし、それなら成人教育としての啓発活動はなされてきたか? いや、めにつくのは「異民族から分離独立だ」といういさましい議論か、「琉球諸方言は日本語の一部であることは証明済みで、いまさら疑問の余地もない」「伝統方言が本土諸方言と相互理解不能だったのは、えだわかれしてからながい年月がたったから」といった説教調であった。また、日本語の原型をとどめている、かけがえない宝庫というキャッチ・フレーズのもと、おびただしいフィールド・ワークがつみかさねられる一方、方言の退潮はいかんともしがたく、それは近代国民国家のうごかせない趨勢なのだという断定もなされてきた。しかし、社会言語学およびそれに隣接する政治社会学は、これらのいいまわしが、無自覚に自己のたちばを正当化したデマゴギーであることをうきばりにしてしまうのだ。

#### 四 「発明された伝統」としての言語／方言と歴史

天皇家の儀礼、神前結婚式、年賀状、演歌……。欧米の歴史家の指摘をまつまでもなく、われわれが「伝統」と信じているもののおおくは、近現代の産物である。伝統だといひはり、わかもの／新参者に自分たちの趣味をおしつけるひとびとは、たかだか十数年ぐらいの「わが校の伝統」や「部の伝統」といったでまかせをわらえないのである。それはともかく、有名な『沖縄対話』でかたられていた、東京のことばは全国で大体通じるといういいかたは、あきらかに「誇大広告」であった。はなしことばとしての標準語が成立していくのは、それから十年以上。そればかりか正書法さえ確立していなかった。残酷ないいかただが、『琉球処分』によってかたちづくられた「沖縄県民」という「発明された伝統」ばかりでなく（琉球王国崩壊まえの被支配層に「全県」レベルでの一体感などない）、「普通語」「標準語」としてあてがわれたものは「本土」の「共通語」でなどなかった。そして、戦前の「県民」も、東北出身の教員の「なまり」がつよくてききとれないという現実に接していたし、九州各県をはじめとする全国各地が「方言」で生活し、学校をはじめとする公的空間までもが「方言」でみちみちていたという「格差」を、でかせぎ／軍隊／疎開であじわっていたはずなのだ。

してみると、「普通語」「標準語」をマスターしないとたちゆかないという理屈が現実にとどのくらい妥当したかはあやしい。もちろん、差別はきびしく、ときには死にいたるきっかけとさえなった。

他府県の「方言」（○○弁とよばれる）は容認されても、異民族視されかねない「県人」は「りっぱな標準語」をはなさないかぎり、みとめられないという認識もおそらくただしかっただろう（いわゆる「方言論争」はこのことをめぐってかわされている）。しかし、「普通語」「標準語」をおしつける当人自身が英語教師同様満足に駆使できないのが大半だったという逆説Ⅱ悲喜劇はうごかせない。

これでおわかりだろう。「県民」が戦前／戦後目標とさせられ・してきた「標準語」とは実体ではなく、蜃気楼ないし逃げ水のようなものであり、日本全国を網羅する媒介語だとか、太古から連綿と受けつがれてきた伝統だといったことは、あきらかなデマであった。ひとびとは、たちばがよわく、あせていたからこそ、まんまとサギにあつてもきづかなかった。

「日本らしさ」、「日本の歴史」として提示される「日本の伝統」も相当程度まゆつばである。コメを常食とする農民は少数だったし、天皇を農業神として具体的イメージをもって信仰する農民も少数だった。琉装が非合理／時代おくれというリクツにしろ、和装自体、時代差／地域差／階級差がはげしく、洋装が西欧からの受容だったことはいままでもない。いや、近代学校で「県民」にあてがわれた、「日本的」教育のなかみのほとんどが、実は外来か近代になってからの捏造といってさしつかえない。国民概念／国境概念などはその最たるものだ。立派な「日本人」になる（富山一郎）という「県民」の志向性は、でっちあげられた「日本」という「実体」Ⅱ幻影への奔走だったのである。

それでもゆかたになったとか、いまさらあともどりできない、といった総括は当然でるだろう。し

かし、それはひとつの政治的選択である。同時に、「沖縄県」という〈県域〉内を一体感をもって把握する感覚自体が近代の産物（「琉球処分」以降）にすぎないのだから、琉球王国の空間イメージを利用する「独立論」もすぐれて近代的な意識であることをわすれてはならない。

#### 文献（おもなもの）

東江康治1981「被理解度における本邦各地方言の比較」『与那嶺松助教授記念論文集』

東江／東江／石川／大城／本永／詫磨1983「中学生の言語生活と方言理解度——琉球方言圏において——」『琉球大学法文学部紀要 社会学篇』第26号

東江／東江／大城／本永／石川／詫磨1985「琉球方言基礎語彙の難易度と中学生の方言理解度」

『琉球大学教育学部紀要』第28集第二部

飛鳥井雅道編1984『国民文化の形成』筑摩書房

イ・ヨンスク1996『「国語」という思想 近代日本の言語認識』岩波書店

上村幸雄1975「日本の方言、共通語、標準語」

大石初太郎／上村幸雄編『方言と標準語——日本方言学概説』筑摩書房

——1978「民族、国家、言語 「処分」と言語政策——その考察の前提」『新沖縄文学』38



大野眞男1995「中間方言としてのウチナーヤマトグチの位相」

『言語 95・11別冊 変容する日本の方言』大修館書店

岡本恵徳1981『現代沖縄の文学と思想』沖縄タイムス社

小熊英二1995『単一民族神話の起源』新曜社

糟谷啓介1992「言語・境界・領土」『現代思想』Vol.20-9

加藤秀俊1958「明治二〇年代ナショナリズムとコミュニケーション」

坂田吉雄編『明治前半期のナショナリズム』未来社

亀井 孝1971『亀井孝著作集一 日本語学のために』吉川弘文館

—— 1980「国語学」国語学会編『国語学大辞典』

亀嶋庸一1996「想像の共同体をめぐる想像力」『思想』第五号

久保田淳ほか1992, 1996『新しい国語2』東京書籍

倉井則雄1987『トン普通語処方箋』（私家版）

クルマス1985, 山下公子訳1987『言語と国家』岩波書店

桑江良行1954『改訂 標準語対応 沖縄語の研究』崎間書店

子安宣邦1996『近代知のアルケオロジー』岩波書店

酒井直樹1996『死産される日本語・日本人』新曜社

- 佐藤成基1995「ネーション・ナショナリズム・エスニシティ」『思想』第八号
- 真田真治1987『標準語の成立事情』PHP研究所
- 真田真治／ダニエル・ロング1992「方言とアイデンティティ」『言語』Vol.21, 10
- 柴田 武1958『日本の方言』岩波書店
- シュリーベン＝ランゲ1991, 原／糟谷／李訳1996『【新版】社会言語学の方法』三元社
- 杉本良夫1996「日本文化という神話」『岩波講座現代社会学23 日本文化の社会学』
- 鈴木広光1993「日本語系統論・方言周圏論・オリエンタリズム」『現代思想』Vol.21-07
- 高江洲頼子1994「ウチナーヤマトウグチ」『沖縄言語研究センター報告3』
- 田中克彦1981『ことばと国家』岩波書店
- 田中克彦／ハールマン1985『現代ヨーロッパの言語』岩波書店
- 徳川宗賢／真田真治編1991『新・方言学を学ぶ人のために』世界思想社
- 富山 一郎1990『近代日本社会と「沖縄人」』日本経済評論社
- 1994『国民の誕生と『日本人種』』『思想』第一一号
- 永田高志1991「沖縄に生まれた共通語（文法編）」『琉球の方言』15
- 1993「沖縄に生まれた共通語（音韻・アクセント編）」『琉球の方言』17
- 成田義光1964「沖縄の言語生活」琉球大学人文社会科学研究所『人文社会科学研究所』第2号

西岡 敏1992「うちなー口をワープロする↓沖縄方言辞典の必要性」

『沖縄言語研究センター資料』No.101

西川長夫／松宮秀治編1995『幕末・明治期の国民国家形成と文化変容』新曜社

野原三義1996「沖縄の若者方言」『沖縄文化研究』22

バートン1996「境界からの日本史 想像の境界、現実の境界」『現代思想』Vol.24-9

橋本 満1996「中央と地方」『岩波講座現代社会学』23 日本文化の社会学

原 聖1990『周縁的文化の変貌』三元社

—— 1996「民族を超える言語運動」『現代思想』Vol.24-9

藤原幸男編1992『沖縄をテーマとした国語読本の編成に関する研究（第二集）』

藤原与一1975『方言生活指導論 方言／共通語／標準語』三省堂

船津好明1986「よみがえれ地方語 1～15」『琉球新報』（6／6～7／16）

—— 1987「沖縄文化のなかの方言の役割」『自主の道』第二六号

—— 1988『伝統文化の真髄 美しい沖縄の方言』技興社

文化庁1977『標準語と方言』

外間守善1971『沖縄の言語史』法政大学出版局

ましゅう・ひでのり1991「同化装置としての『国語』」『教育社会学研究』48集

- 1992 「イデオロギー装置としての『日本』史」『解放社会学研究6』
- 1995 「歴史記述にとつての被差別意識と準抛集団」『解放社会学研究9』
- 1996 「ウチナアンチュ意識の成立過程試論」
- 専修大学現代文化研究会『現文研』第72号
- 1996 「固有名詞にみる社会変動」『社会学評論』第186号
- 1997 『イデオロギーとしての「日本」』三才社
- 村井 紀1996 「近代日本におけるnationの創出」
- 『岩波講座現代社会学24 民族・国家・エスニシティ』
- 本永守靖1974 「地域社会と国語科教育」『愛媛国文と教育』第6号
- 1980 「沖縄における児童生徒のことば」『琉球大学教育学部紀要』第23号
- 1984 「明治期における沖縄県の国語科教育」『琉球大学教育学部紀要』第27号
- 屋比久浩1987 「ウチナーヤマトウグチとヤマトウウチナーグチ」
- 『国文学解釈と鑑賞』第五二巻七号
- 山極越海1965 「方言理解度について」『国語学会『国語学』62
- 李 成市1996 「近代国家の形成と『日本史』に関する覚え書き」『現代思想』Vol.24-9
- 李 孝徳1996 『表象空間の近代 明治「日本」のメディア編成』新曜社

- Anderson, B., 1983, =1991, *Imagined Communities*, Rev. ed., Verso
- Duetsch, K.W., 1953, *Nationalism and Social Communication*, Havard Univ. Press.
- Ferguson, C.A., 1959, =1982, *Diglossia*, in Giglioli, P.P.(ed.), *Language and Social Context*, Penguin Books
- Hobsbawm, E., & Ranger, T., ed. 1983, *The Invention of Tradition*, : Cambridge Univ. Press.
- Hudson, R.A., 1980, *Sociolinguistics*, Cambridge, : Cambridge Univ. Press.
- McLuhan, M., 1962, *The Gutenberg Galaxy : The Making of Typographic Man*, Univ. of Tronto Press
- Saussure, F., de, 1916, =1982, *Cours de Linguistique Générale*, Payot, Paris
- Trudgill, P., 1974, =1983, *Sociolinguistics*, Rev. ed., Penguin Books